

資料紹介 竹本播玉資料について 明治～昭和の娘義太夫

南本 有紀

TAKEMOTO Harigyoku, a Woman Gidayu-reciter in 1870-1920s
Introduction of Gifu Prefectural Museum's a Brand-new Collection

Yuki MINAMIMOTO

はじめに

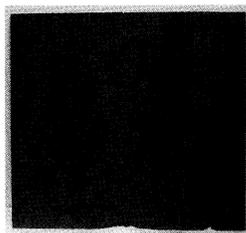
本稿では、昨年 11 月に関市某家より寄贈いただいた娘義太夫・竹本播玉¹⁾(図1)旧蔵資料を紹介する。



図1 竹本播玉肖像(仙台市で撮影)

娘義太夫²⁾とは、明治～大正に隆盛した女流太夫による素浄瑠璃(人形操りが伴わない太夫の語りと三味線の伴奏のみの演奏)である³⁾。流行の中心地は東京だったが、義太夫の本場・大阪をはじめ各地で盛んに興行があり、当時は素人義太夫(素義)も大人気だったため、男女ともに義太夫師匠としても活躍した。加えて、娘義太夫は、ときに座敷芸としてのニーズもあった。そのため、男性の場合、太夫と三味線の二人高座が通例だが、娘義太夫では多くが弾き語りも行った。最盛期、彼女らの大半はローティーンでデビューする元祖アイドル的存在で、熱烈なおっかけファンを擁する有名スターがいる⁴⁾一方、各地を巡業する傍ら、巡業地に点在する弟子らに稽古をつける人も少なくなかった⁵⁾。

今回紹介する竹本播玉は、こうした芸人たちのひとりで、人生の大半を旅に暮らしたようである。寄贈品は、旅行鞆と見台の桐箱各 1 点(図2)、それぞれにたくさんの浄瑠璃本が詰め込まれていた。以下、最初に娘義太夫とそのブーム⁶⁾について概説して、つぎに寄贈資料をリストに整理したものを示しながら、播玉について簡単にまとめてみたいと思う。



↑箱に書かれた芸名
→分解した見台と床本などが
ぎっしり収納されている

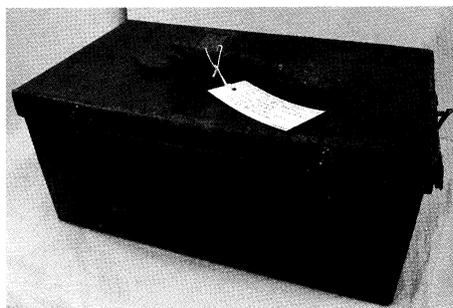


図2 見台箱と旅行鞆

1 娘義太夫について

さて、女流義太夫(女義)どころか、浄瑠璃がすっかり遠い存在になった現代⁷⁾の生活では、それがどんな芸能で、どういう魅力が明治の人々の心を捉えたのかを想像することが難しくなってしまった。当時のようすを知る人は、つぎのように語っている。

若手の婀娜っぽいのが花簪に肩衣姿で、こっちを横目で見ちゃニッコリするんだから、たまらないよ。(中略) 触りで櫛や簪を落として力を入れる、見台に両手をついて伸び上がってみたり、そうかと思うと、額を叩きつけるように首を伸ばして体をもみくちやにしてみたり(中略) 櫛や簪を振り落すところが、なんととも言えないわけなんだ。(中略)

彼女らが高座に姿を見せただけで、寄席の中がパツと明るくなるんだから。実際、電灯の明るさが増したように思えたもの。美しかったね。本当は今ほど明るくはないんだよ、高座の上も寄席も。ポオツとしているところに、するすると簾が上がってゆくと、そこに花の姉妹が花簪に肩衣姿で坐ってるの。で、三味がときに甲高く、ときに重く響く中を、昇之助の音がぐるぐると客席をまわってゆく。次第に昇菊の三味線がはずに傾き出し、それにつれて昇之助の肩が小刻みにふるえて、花簪が揺れ出す。そうなると、今度は両手に注目する。こちらの予想通りに、その白い手が、ついと見台の上に置かれて、上半身が伸び上がる、次いで額もつかんばかりに見台の上に、ぐいと首が伸びて、全身がもみくちやになってゆく…。(中略) ふたりの姿が目には焼きついてしまっていて、いつになっても忘れられないね。⁸⁾

北村銀太郎(1890-1983)⁹⁾が、明治30年代後半～大正にかけて一世を風靡した豊竹昇菊(姉、三味線)・昇之助(妹、太夫)姉妹¹⁰⁾の舞台を昭和55年(1980)頃に回想した聞き書きである。可憐な乙女の熱演に心蕩かせた書生らののぼせっぷりを生き生きと再現していて、思わず引用が長くなった。本稿の主人公・播玉もご覧の通りの麗しさだが、当時のスターはローティーンから二十歳そこそこの妙齢の美人ばかり、「芸よりも色」「器量ばかり、さわり(クライマックス、聞きどころ)ばかり」で「芸は二の次」の観がなきにしもあらずではあった。

とはいえ、昭和の美空ひばりに匹敵する明治の元祖アイドル・竹本綾之助は義太夫節の本場、大阪仕込みの本格派だったし、北村銀太郎も「本場の名古屋」¹¹⁾から来た竹本京枝や呂昇が人気に火を着けたと述懐しており、やがて、「芸」に比重が置かれるようになる。

そもそも、社会現象にまでなった明治以前から、とくに江戸では娘義太夫が好まれた。つまり、もともと、東京は美声を愛好する風があった。ややもすれば、悪声をものもしないいぶし銀の「語り」が良いとされる大阪発祥の義太夫節よりも、現在でも人気の衰えない歌舞伎

舞踊の清元節の「歌声」への偏愛ぶりが、女性ならではの「美しい義太夫」を発見させたのではないだろうか¹²⁾。加えて文楽(人形浄瑠璃)がないことが、東京における素浄瑠璃である娘浄瑠璃の人気を確立¹³⁾し、芸を磨いた。

それが証拠に、物語が山場にさしかかると、「どうする」「どうする」と囁し立てたり、楽屋待ちして太夫の乗る人力車を勝手に押しながら並走したという、いささか熱狂的すぎるファン「ドースル連」も明治末には姿を消し、替わって、文人たち¹⁴⁾が寄席を訪れるようになった。ここではその流れを詳述する余裕がないが、年表(表1)にまとめたので、参照されたい。とまれ、娘義太夫の良さとは、耳に快い語りの芸だというべきだろう。

2 娘義太夫たち

ところで、女義たちを一覧(表2)に整理してみると、つながりが見えてくる。家元がなく、従って、世襲がなく、実力主義のこの世界は、師弟関係と一座の人間関係によって彼女らの社会が形成されているようすが窺えるのだ。

とくに注目されるのが、3世¹⁵⁾竹本土佐太夫(のち播磨翁)を仲介したネットワークである。

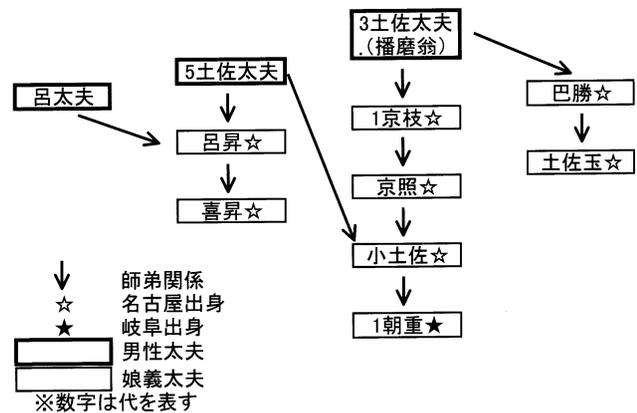


図3 師弟関係

『名古屋市史 風俗編』(名古屋役所(1915).)によると、土佐太夫は名古屋の素義たちの要望で再々の来名以降、名古屋市内に在住し、多くの門人を育てた。そのなかに初期娘義太夫の最重要人物である京枝と呂昇が含まれており、いずれも多く門人を擁したため、名古屋圏域に土佐太夫系義太夫芸人が輩出したのである。われわれの播玉もこの系列に連なる(資料14)。次節で、いよいよその資料群について紹介しよう。

3 竹本播玉について

竹本播玉(本名・杉本せき)は、明治末期から戦前に

かけて、名古屋を拠点に全国で巡業・義太夫指導に当たった娘義太夫である。寄贈品に含まれるのは撥のみだが、遺品には三味線もあった（三味線を弾く人にあげてしまった由）そうだから、弾き語りも行ったのだろう。稽古本には朱章（譜面）らしき書き込みも見られる（図8下など）。

最初に、播玉資料が関市に残った経緯と寄贈者との関係を説明するために、系図を示す。

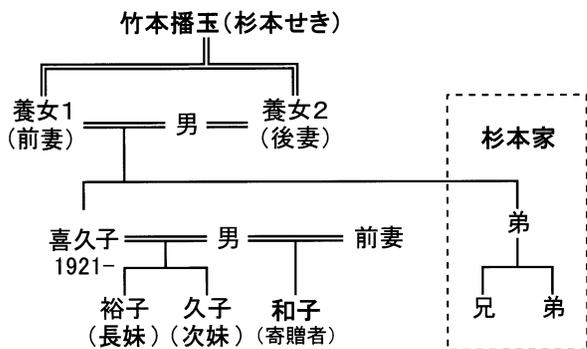


図4 系図

関市在住の寄贈者は、播玉の孫の義娘にあたる。寄贈者によると、播玉は、最初、名古屋在住で、一時、中津川に仮住まいをし、その後、関¹⁶⁾に移住、寄贈者が小学生の頃(1950年代)、関市で亡くなった。移住の経緯は、巡業や出稽古中、留守を預かる養女1夫妻に仕立て屋を営ませていたものの、孫が幼い内に実母が他界し、播玉が旅暮らしで不在が長引く中、養女2(継母)夫妻と孫の関係がうまくいかず、孫を不憫に思って養子縁組を解消、名古屋の家を整理して関市に移ったとのことである。中津川には、関市移住前、名古屋から通うのがたいへんなので、同地で稽古をつけていた旦那衆に宿舎を世話してもらったそうで、門人には、芝居絵で有名な郷土画家・中川ともがおり、ともは芸名「播登」を名乗る¹⁷⁾ほど稽古に励んだ。

—四十二歳で大垣から中津川へ帰られ、絵に専念されたわけですが、そのころ恵那文楽や恵那歌舞伎に関係し、義太夫もやられた。(※以上、インタビュー)
中川 やったんです。どういふものかーぺんやってみたくて、竹本播玉といういい師匠がおりました(※下線は筆者)からね。

まあ義太夫だけは自信があります、などと思ったのは大間違い、やはり堂に入るといふことは、天才と数口ですよね。¹⁸⁾

上記は、昭和52年(1977)、とも88歳のときの述懐

だが、「間孔太郎氏、間四郎氏名誉市民推挙祝賀会」(1971年)で義太夫を語っている高座姿の写真(当時81歳)

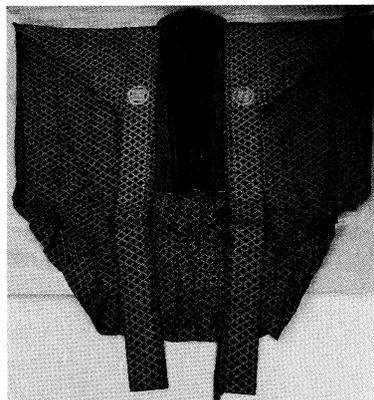


図5 竹本播玉の肩衣(資料123)

が残っている¹⁹⁾。この写真でもも着用している肩衣は、女義の象徴といわれ²⁰⁾、寄贈資料群にも2領²¹⁾ある(図5)。

この肩衣は小さなもので、着用者の小柄さをしのばせる。播玉の愛用品は、例えば、撥の袋(図6)にはかわいらしいアップリケや花形飾り結びの留め具があしらわれ、浄瑠璃本(図7)には花(桜?)が書き加えられるなど、可憐な女性らしい好みを伺わせるものが多い。

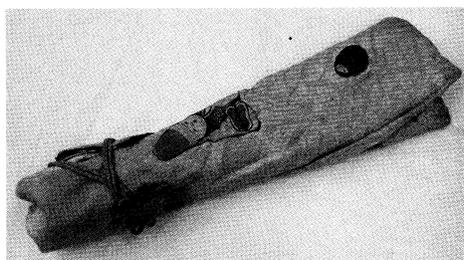


図6 撥(資料120)

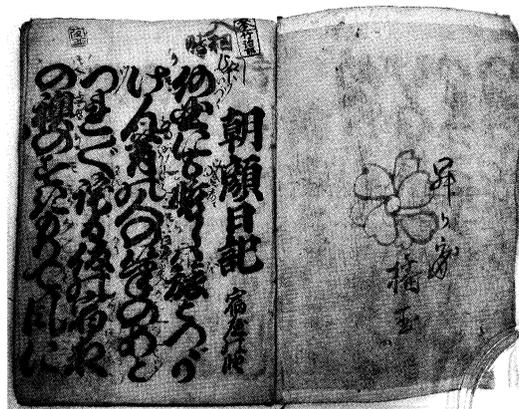


図7 浄瑠璃本(稽古本)(資料91)

反面、稽古本(図8)には、容赦なく書き込み、紙を貼るなどして、よく使い込まれており、いつもページをめくる手がかかるためにちぎれてよれよれになった頁右

下を厚紙で補強するなど、よく稽古した形跡がある²²⁾。縦4.5 cm×横2.5 cmの極小の名刺(図9)は、厳しい芸の世界に生きるプロの職業人の矜持を思わせる。男尊女卑の近代日本を、自立した職業女性として生きた播玉の姿を彷彿させる遺品である。



図8 稽古本(資料23、85)



図9 名刺(資料9)

4 寄贈資料について

前節では播玉資料のいくつかを写真で紹介した。冒頭で示した鞆と桐箱に入っていた資料は、数量の多い順に、稽古本(版本に黒朱入り)76冊、写本(浄瑠璃本)26冊、同(記録類)3冊、写真7枚、印刷本3冊、その他12点の計127点であった。表3にリストを示す。

これらのうち、とくに記録類(「播玉連」²³⁾=素人弟子

たちの住所録や公演の出費録など)は、雄弁に播玉の生活を物語ってくれる。恵那文楽との関係を伺わせる写真(資料2)や中津川病院の通院記録(同95)は、中津川での暮らしを跡づけるものである。北海道には2回(1913、1915年)訪れており(資料29、44、107)、先の住所録(同34、95)をざっと見る限り、東京・神奈川・大阪・兵庫など各地に門弟がいたらしい。思った以上に活動範囲が広い。それだけ広範な義太夫愛好層が、かつては存在していたということだろう。

また、浄瑠璃本(102冊)の約1割、12点(資料26、31、38、56、79、82、84、85、96、97、109)+袱紗1点(同121)に播玉以外の芸人の名前(11人)がある(素人の名前は除く)。高価な浄瑠璃本は師匠や先輩から借りて書き写したり、先輩から譲り受けることが多かった²⁴⁾。中でも「豊竹巴蝶」²⁵⁾は浄瑠璃本5冊(同26、38、79、84、109)にその名があり、非常に近い関係であったと思われるが、残念ながらいずれも経歴未詳である。

おわりに

以上、娘義太夫・竹本播玉の旧蔵品について概述した。娘義太夫についての先行研究が少なく、それも東京で活躍した人物に限られるため、現段階では、名古屋ベースの芸人であった播玉について詳しいことはよくわからない。彼女が所属していた「昇り家」についても、全く資料を探し出せなかった。中津川や関での播玉の生活についても何らかの資料・記録が残っていないか、知りたいことはまだまだある。

例えば、遺族のお話によると、播玉は関市・新長谷寺の三重塔修復²⁶⁾に際して寄進し、名簿に「竹本播玉」とあったと聞いているそうだが、現在、境内にそれらしい掲示はなく、確認できていない。また、没後、名古屋市・覚王山日泰寺に旦那衆が墓を建ててくれたというが、それも未確認である。

今後は、資料のリスト化作業で抽出した固有名詞にアンテナを張りながら、引き続き情報収集を続けていきたいと思う。「播玉連」人名録にも、興味深いソースが眠っていそうである。本稿は甚だ未整理・不勉強の段階での執筆となった。大方のご教示を願いたい。

末尾ながら、貴重な資料を寄贈いただきました遺族・関係者の皆様に深謝申し上げます。

註

1) 芸名のみ「はりぎょく」は遺族によった。「はんぎょく」とする読み方もある。(岐阜県美術館(1988). 中川とも展 天衣無縫の芝居絵師, 岐阜県美術館.)

- 2) 女義太夫とも。とくに東京では「娘義太夫」と呼んでいた。戦後、女流義太夫と呼称するようになり、略称の女義もよく用いられる。本稿では、主に「娘義太夫」とし、適宜、女義等他称も使用する。
- 3) 以下の概要は下記を参照した。
水野悠子(2003). 江戸・東京 娘義太夫の歴史, 法制大学出版局。
水野悠子(1998). 知られざる芸能史 娘義太夫, 中央公論社。
- 4) 竹本素京は、「三十でも四十でも」娘義太夫と呼ばれた「若さ、色気、はなやかな響き」が、「芸に色気、人氣稼業」であった一面を反映していると語っている。(竹本素京・加藤雅毅(1990). 弾き語り女義太夫一代, 草思社)
- 5) 素京は東京の暑さ寒さを避けるため「二八月は旅が多かった」といい(前掲4)、「女越路(太夫)」の異名をとった名人・豊竹団司は座長として一年の大半を旅巡業に暮らし、家に帰るのは盆・正月だけだったという(林芳樹(1988). 女義太夫一代 豊竹団司じょうり人生, 神戸新聞出版センター.)。
- 6) 昭和29年(1954)段階で、女義は「過ぎ去ったロマンティックな夢」「舞台の芸から次第に遠ざかるのでは」と懸念されている。(守美雄(1954). 展望 女義太夫の現況, 演劇界 12(3).)
- 7) 現在の文楽(人形浄瑠璃)興行は、国・大阪府・大阪市・日本放送協会の助成金で運営される財団法人文楽協会に所属する太夫・三味線・人形の三業の技芸員によって国立文楽劇場を主な公演場所として行われている。後継者養成の研修も国立劇場が担う。つまり、公演収入による営利活動ではなく、全く、公共が保護育成する伝統芸能保護育成事業となっている。(藤田洋(2011). 文楽ハンドブック第3版, 三省堂)
最近では、昨年6月以降、大阪市長が文楽協会への補助金支出について難色を示して話題になった。結局、補助金額を大阪公演の有料入場者数に連動する方式を取り入れたと報じられている。(産経新聞(2012). 2012年12月20日。
<http://sankei.jp/msn.com/politics/news/121220/lcl121212201244-n1.htm> 2013年1月18日閲覧)
- 8) 北村銀太郎述, 富田均編著(2001). 続聞書き・寄席末広亭, 平凡社。(北村銀太郎述, 富田均編著(1981). 聞書き・寄席末広亭一代, 少年社. の改題・復刻)
- 9) 建築業を経て、寄席経営に転換、新宿・末広亭の席亭(支配人)を37年にわたって務めた。諸芸に通じ、「大旦那」と尊称された落語界の重鎮。
Wikipedia「北村銀太郎」項
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%97%E6%9D%91%E9%8A%80%E5%A4%AA%E9%83%8E>
2013年1月18日閲覧
- 10) 引用文中にあるとおり、姉妹は「花の昇菊・昇之助」(木下奎太郎)と詩にも謳われた。
- 11) 大阪弁イントネーションで語られる義太夫節は、関西圏以外の出身者は「なまりがある」ため、習得が難しい。その点は名古屋圏域も同様だが、芸所の土地柄のみならず、娘義太夫初期のスター(京枝、呂昇)がいずれも名古屋出身(但し、京枝は京都生まれで名古屋に嫁した)だったため、東京では「本場」とみなされていたようだ。
小説『仏果を得ず』(三浦しをん(2007). 双葉社.)では、主人公で関東出身の新米太夫が、日常生活でも関西弁を使ってイントネーションを矯正するようすが描かれている。
- 12) 倉本喜弘は、明治初期に東上した竹本越路太夫の美声が東京の聴衆を魅了し、それを受け継ぐ存在として娘義太夫が人気をよんだと分析している。(倉本喜弘(2006). 芝居小屋と寄席の近代「遊芸」から「文化」へ, 岩波書店.)
また、綾之助を主人公にした小説『星と輝き花と咲き』で、松井今朝子は、綾之助の義母で相三味線だったお勝(芸名・鶴勝)に東京人は甲高い歌声が好きなのだと語らせている。(松井今朝子(2010). 講談社.)
- 13) 娘義太夫が「文楽より一枚下」にみなされる大阪では、「東京もんのジョーロリは関東なまりが強うて聞いてられん」上方の娘義太夫たちにとっても、東京の興行界は無視できない存在であった。(前掲5)
- 14) 有名な娘義太夫ファンとして、竹久夢二(1874-1959)、志賀直哉(1883-1971)、高浜虚子(1884-1934)など文学者や「ライオン宰相」濱口雄幸(1870-1931)など。
- 15) 参照した下記文献には「4世土佐太夫」とあるが、4世(?-1839頃)は年代が合わず、3世(1803-1900)かと思われる。しかし、播磨翁と名乗った太夫の存在が確認できず、従って、3世が播磨翁と同一人物か否かも不明。後述するように、「播磨翁門人」(資料14以下、番号は表3の資料番号)とする播玉が摂津大掾関係者と思われる(同4、11、12より)ため、本稿では暫定的に摂津大掾門弟の3世とした。なお、参照文献等はつぎのとおり。
水野悠子・国立劇場調査養成部芸能調査室(2000). 娘義太夫 人名録とその寄席, 日本芸術文化振興会, 名古屋市役所(1915). 名古屋市史 風俗編, 名古屋市役所。
Wikipedia「竹本土佐太夫」項
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AB%B9%E6%9C%AC%E5%9C%9F%E4%BD%90%E5%A4%AA%E5%A4%AB> 2013年1月18日閲覧
- 16) 遺族によると、関市長住町に住んでいたそうだが、寄贈資料(14、84)はいずれも「関町富本町」とする。赤。
- 17) 赤井達郎(1972). 中川とものこと, 日本美術工芸(402).
- 18) 玉田幸人(1991). 美しく濃く 岐阜の美術家たち, 岐阜県美術振興会。
- 19) 中津川市、中津川市教育委員会(1992). 中津川市制40周年記念 中川とも展(解説目録)。
- 20) 前掲3)、水野(2003)。
- 21) 前掲4)によると、時代物と世話物で変えるものだという。
- 22) 当館では、平成24年(2012)2月に、岐阜市内某家より岐阜県本巢市の真桑人形浄瑠璃(重要無形民俗文化財)の三味線弾きだったという豊澤廣吉の資料を寄贈・受納している。廣吉の残した稽古本はわずかであるが、それらと比べると、播玉の稽古本の書き込みは圧倒的に多く、本も使い込まれている(保存状態の違いもある)。
- 23) 素人義太夫の弟子たちを「御連中」(前掲3)、水野(2003.)「連中さん」(前掲4)と呼ぶ。
- 24) 前掲4)
- 25) ちなみに、ビートたけしの祖母は娘義太夫で、芸名を「竹本巴蝶」といった。(北野さき(1988). ここに母あり, 太田出版.)
- 26) 明治以降の修復は、昭和6年(1931)と昭和34~36年(1959-61)の2回行われている。

和暦	西暦	事項 (太字斜体は社会の動き *は男性)	和暦	西暦	事項 (太字斜体は社会の動き *は男性)
宝暦1	1751-64	この頃、娘義太夫が誕生	昭和23	1948	義太夫協会が「義太夫教室」を開始
享和2	1802	大坂で娘義太夫が大当りする	昭和25	1950	女流義太夫連盟発足、復興をはかる、以後「女流義太夫」「女義」
文化年間	1804-17	娘義太夫が奇蹟に進入			小工佐貞美節で月例興行
文化2	1805	この頃、5世竹本彌太夫 (?-? 1868 襲名)*が京都から名古屋へ移住	昭和26	1951	女義の興行を再開
文政2	1819	江戸で娘義太夫が風俗騒乱のため禁止される	昭和28	1953	本牧亭定期公演が始まる (~1989)
天保4	1833	この頃、名古屋に「文屋(水野長七)*という浄瑠璃興行	昭和30	1955	小工佐が勲五等冠章受章、女義初
天保6	1835	この頃、名古屋に「文屋(水野長七)*という浄瑠璃師匠	昭和38	1963	国立劇場開演
天保9	1838	竹本彌太夫*が名古屋小島町明神社で浄瑠璃興行	昭和39	1964	後継者育成のための研修制度を開始
天保12	1841	上方の竹本三根太夫*が名古屋小島町明神社で浄瑠璃興行	昭和40	1965	竹本三根太夫が重要無形文化財保持者(人間国宝)、女義初
天保16	1844	この頃、名古屋で素人の浄瑠璃発表会が盛ん	昭和41	1966	大阪に国立文楽劇場が完成
慶応2	1866	天保の改革 (~1842) で娘義太夫35人が捕縛される	昭和47	1972	
明治1	1868	3世竹本三根太夫*(1803-1900)が大坂から初めて名古屋へ、これ以降回数来名	昭和57	1982	
明治4	1871	この頃、竹本三根太夫が名古屋から上京して奇蹟で興行	昭和59	1984	
明治6	1873	この頃、竹本三根太夫が名古屋から上京して奇蹟で興行			
明治17	1884	竹本熊玉一座が名古屋巡業			
明治18	1885	竹本熊玉が大阪から上京			
明治20	1887	淡草彌若町に文楽座建設、大阪から文楽座一行が上京して興行			
明治21	1888	竹本三根太夫*(?のち竹本三根太夫)が大坂から上京して興行			
明治22	1889	竹本三根太夫*(?のち竹本三根太夫)が大坂から上京して興行			
明治23	1890	竹本三根太夫*(?のち竹本三根太夫)が大坂から上京して興行			
明治24	1891	竹本三根太夫*(?のち竹本三根太夫)が大坂から上京して興行			
明治25	1892	竹本三根太夫*(?のち竹本三根太夫)が大坂から上京して興行			
明治20年代後半	~30年代	土佐太夫*(?のち竹本三根太夫)が名古屋から上京、竹久夢二らがファン			
明治27	1894	京枝一座が改良義太夫(洋装・東装)、地方巡業も			
明治31	1898	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治32	1899	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治33	1900	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治34	1901	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治35	1902	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治37	1904	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治38	1905	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治40年代	1907-16	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治41	1908	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治42	1909	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
明治45	1912	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
大正2	1913	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
大正3	1914	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
大正12	1923	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
大正14	1925	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
大正末期		土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
昭和4	1929	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
昭和6	1931	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
昭和10年代	1935-44	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
昭和14	1939	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
昭和19	1944	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			
昭和20	1945	土佐太夫が名古屋に居り、一座で各地巡業			

[出版]

- 藤田洋(2011). 文楽ハンドブック第3版. 三省堂
- 倉田喜弘(2006). 芝居小屋と奇蹟の近代「遊芸」から「文化」へ. 岩波書店.
- 水野悠子(2003). 江戸・東京. 娘義太夫の歴史. 法政大学出版局.
- 水野悠子(2003). 江戸・東京. 娘義太夫の歴史. 法政大学出版局. 人名録とその寄席. 日本芸術文化振興会.
- 水野悠子(1998). 国立劇場調査部委託調査室(2000). 娘義太夫. 中央公論社.
- 小島孝・小島和子(1996). 親座貫ち. 回想の明治・大正・昭和. 朝日新聞社.
- 名古屋市役所(1916). 名古屋市史. 風俗編. 名古屋市役所.

日清戦争 (~1895)

住之助が巡業先の秋田で客死
 住之助が引退
 縁之助が上京
 呂昇が名古屋から上京
 「風俗画報」に「当今の女義太夫」連載
 「万朝報」が「ドール」連載
 豊竹貞菊・昇之助姉妹が大坂から上京、志賀直哉らがファン
 葛城天華「女義太夫の裏面」で非難

日露戦争 (~1905)

この頃から、学生から文人(志賀直哉・有島生馬ら)にファン層が移る
 呂昇が再び上京、以降、全国巡業
 名古屋の竹本加賀彌*が没、素人弟子多数、うち團枝*は東京で活躍
 この頃、北原白秋・真田秀雄らが作品テーマに、木下幸太郎「花の昇菊昇之助」など
 縁之助が復讐
 豊浜屋子「俳諧師」に「国民新聞」に連載、登場人物は小工佐がモデル
 文楽座が松竹に経営譲渡
 「国民新聞」に縁之助半生記を連載
 呂昇が松竹専属に

第一次世界大戦 (~1918)

豊竹貞菊・縁之助(1923, 1927)脱もが相次いで引退、これ以降、人気下火に
 これ以降、竹本三根太夫が名古屋で活動
 この頃、小工佐らが津州巡業
 この頃、竹本素女らが津州巡業
 これ以降、ラジオ放送多数

世界恐慌

読売新聞に「小工佐物語」連載
 この頃、画室・中川ともが中津川で竹本彌太夫に弟子入り
 娘義太夫の定座が皆無になり、一門会もしくは東会・女研自主興行に
 この頃、素人藝太夫(素養)が大流行

第二次世界大戦 (~1945)

女研の戦中最後の興行(真会は1943まで)
 東橋亭が戦災で焼失、以降、娘義太夫定座がなくなる
 小工佐が中津川に疎開
 戦後、竹本彌昇が出身地の岐阜で活動

表2 人名録

Table with columns: 姓名 (Name), よみ(50音順) (Romanized Name), 生没年 (Birth/Death Year), 活躍時期 (Active Period), 役 (Role), 階級(御事頭以下) (Ranking), 住所(江戸・江州) (Residence), 前名・後名 (Previous/Posterior Name), 出身 (Origin), 備考 (Remarks). The table lists numerous individuals, including family members like 竹本相玉, 竹本相五, and various retainers and officials.

竹本相玉 1887-1968 甲府 出陣(御事頭以下) 江戸・江州 竹本相玉(初代) 甲府 出陣(御事頭以下) 江戸・江州

※名古屋の墓人(名古屋市長府、1915年、名古屋印史、黒路編、名古屋墓所併所、より作成)

Table with columns: 氏名, 生年, 没年, 墓所, 備考. Lists names like 竹本昌太夫, 竹本昌七, 竹本昌八, etc., with their birth and death years and burial locations.

※有名子たち
竹本昌太夫
6世竹本佐太夫、豊竹山崎少後、3世竹本津本太夫(三巨頭)
初代兼五、初代京枝(女編中興の祖)
1世は兼五、兼五京枝、兼五京枝、兼五京枝(兼五の祖)
初代兼五、兼五、兼五、兼五(兼五の祖)
昌五、兼五(昌五)

Main genealogical table with columns: 姓名, 生没年, 経歴, 親名, 後名, 出身. Contains detailed lineage information for various branches of the Takemoto family.

※水野笠子、国立書院調査部(2000)、娘兼五、日本書紀文化振興会、より作成
(前掲)の4世竹本佐太夫(のち権藤)は、4世佐太夫(1839頃)・4世権藤太夫(1840-1904)の年代が合わないため、本表では3世佐太夫(1803-1900)とした
他に、藤田洋(2011)、文豪ハンドブック第3版、3巻、参照

名義順・岐阜出身
工藤「権藤」関連姓名
大守 有名子たち

表3 資料リスト

№	書名	資料名・外題	寸法(cm)・行商品	著者	年代	備考
1	身台	WSS D41 H53	25.4 15.3	尾崎士郎(著) 明治三十九年七月一日新聞(朝日)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著) 明治三十九年七月一日新聞(朝日)
2	写真	W45 D27 H22.5	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
3	写真	14.2.9	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
4	写真	10.6 16	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
5	写真	14.3 (ナメジリ)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
6	写真	8.1 14	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
7	写真	11.5 7.5	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
8	写真	15.9 11.9	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
9	写真	10.3 15	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
10	写真	2.5 8.3	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
11	印刷	4.5 2.5 31枚・箱3.9	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
12	印刷	4.5 12.6	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
13	印刷	16.3 21.3	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
14	印刷	18 25	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
15	印刷	15 22	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
16	印刷	16 23	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
17	印刷	21.8 15.5	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
18	印刷	24.5 16.8	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
19	印刷	22.2 18.1	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
20	印刷	23.1 16	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
21	印刷	23.6 16.5	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
22	印刷	22 16	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
23	印刷	22.3 16	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
24	印刷	21.6 15	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
25	印刷	23.6 16	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
26	印刷	23.6 16	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
27	印刷	21 21	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
28	印刷	22.5 15.7	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
29	印刷	22.8 16.1	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
30	印刷	21.1 15.4	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
31	印刷	24.7 16.2	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
32	印刷	27.8 19.5	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
33	印刷	24 16.5	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
34	印刷	22.5 16.7	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
35	印刷	15 19	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)

№	書名	資料名・外題	寸法(cm)・行商品	著者	年代	備考
36	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
37	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
38	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
39	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
40	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
41	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
42	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
43	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
44	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
45	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
46	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
47	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
48	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
49	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
50	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
51	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
52	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
53	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
54	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
55	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
56	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
57	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
58	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
59	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
60	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
61	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
62	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
63	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)
64	印刷	尾崎士郎(著)	25.4 16.2	尾崎士郎(著)	明治39(1908)7月	尾崎士郎(著)

№	種名	産地名・分類	寸法(㎝)／重量	裏書・印字・内題など	年代	備考
114	種古本 腰封状三枚目／奥二面額の 段／竹本腰五	23.2 16.2	断五行／現庄本／加味清助紙／奥三面額段／腰封状三枚目 改良刷本(朱印)(内題) 明治十六年九月十五日刷割印／明治四十二年 九月十五日刷割印 ／別本腰五(腰書) 久松孝吉書(腰書) 腰封状三枚目 明治五十七年／杉本庄(腰書)	明治43(1910)1月		
115	種古本 勢州新道名龍／半次荘家の 段／竹本腰五	22.1 16	勢州新道 勢龍名龍 半次荘家段 百歌五行 萬行部／福高逆福松／腰書記 三段			
116	種古本 福崎逆福松／腰書記三枚目 ／竹本腰五	21.8 15.6	ひらかね腰書記 三の切(内題) 明治卅一年日印刷／全卅一年日刷割発行／福刺 兼巻五巻 兼計百弘(腰書) 日(内題)／新道前の段／巻式平記百五巻 七番	明治31(1898)		
117	種古本 白土巻七ノ目／新吉原原巻や ／折り家	23 16	明治三十四年六月十日刷割印刷／明治三十四年 六月二十二日発行／発行所 水川書局(腰書)	明治34(1901)6月		
118	種古本 腰封巻八ノ下／公助、才三 段／裏の巻／墨田若木庄巻 大字新刻(朱)	23 15.6	明治卅一年日印刷／明治卅三年一 月二十日発行 大正七年三月十日刷割印刷／大 正七年三月十五日再版発行／別本巻部五 久松 兼巻五(腰書)	明治37(1910)3月	裏封被れ 腰書紙(五本口)取え消し	
119	原心巻	W20 D17 H18／厚半			組み立てた状態	
120	巻	W24 L32 D25／厚 38 15.2				
121	巻	W23.5 L7.6 D2.5／厚 27 31	巻雲山嵐(俵紗)		127と組み立て 丸に巻いた裏の羽 透葉逆松皮巻 丸に巻いた裏の羽	
122	裏巻(完巻)	22.2 31 D4.3／厚40 55			丸に巻いた裏の羽 腰書紙十ハーツ4 方巻 腰書紙十ハーツ4 方巻	
123	裏巻	73 70				
124	腰衣	73 70				
125	原心巻	19 15 H7／厚布面				
126	拍子木?	W21.1 L4.4 H13.5 13.6			122と組み立て ハーツ4十厚2十巻具2(巻具)2枚あり	
127	見台(本体・引き出し)				127引は出しに取納 半分欠損 名古屋市西島町は明治9～昭和41 名古屋市中区錦町は明治25～昭和44 1946年区、昭和(1986)～丸の内1～3丁 目 御納屋(御納屋七右衛門)は寛政張薄か 原書紙に墨田若木庄(佐賀)佐賀藩文 庫(御納屋七右衛門)に返書(佐賀藩文 庫)・大文(大野又右衛門)巻具の第四 巻という(巻の巻は裏の巻)	
128	後心巻	159 84	名古屋前西島町御納屋より	～昭和41(1966)		

本主 御納屋本以外
種名以外人名など